教会の奉仕に女性が就くことへの反対論が聖書的でない理由

ベン・ウィザリントン三世（Ben Witherington III）・ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf · 2021年4月 · 2026年10月改訂

ベン・ウィザリントン三世は、アズベリー神学校（Asbury Theological Seminary、ケンタッキー州ウィルモア）の Amos Professor of New Testament for Doctoral Studies であり、合同メソジスト教会（United Methodist Church）の按手を受けた牧師です。

私を知っている皆さんの多くはご存じのとおり、私はイングランドのダラム大学で、C・K・バレット（C. K. Barrett）のもとで新約聖書における女性について博士論文を書きました。私が最初に出版した三冊の学術書は、まさにこのテーマについてのものでした。私が三十数年前にそれに取り組んだ理由の一つは、当時、女性の奉仕の問題をめぐって、とりわけ説教壇に立つ女性の説教者や主任牧師としての女性をめぐって、激しい論争が巻き起こっていたことでした。そもそも聖書には「主任牧師」や「説教者」といった区分は存在しないという点は別にしても、新約聖書は、奉仕における女性の抑圧を正当化するために繰り返し用いられてきました。そして、長年の研究と学びを通して私が知ることになったように、それには聖書的な根拠がなかったのです。もちろん、同じように誠実なキリスト者が、この問題について異なる意見を持つことはありえます。しかし、その意見の違いは、聖書本文の確かな釈義に基づくべきであって、感情やレトリック、単なる教会の規則、疑わしい解釈学などに基づくべきではありません。

そこでこの記事では、女性が霊的な奉仕や職務に就くことに対するよくある反論を、一つずつ取り上げていきます。こうした反論のいくつかは「ハイ・チャーチ」の伝統から、いくつかはむしろ「ロー・チャーチ」（low-church）の伝統から出ています。カトリックや正教会のものもあれば、プロテスタントのものもあります。しかし私たちは、網羅的になろうとしたり退屈になったりすることなく、それらすべての中からいくつかを選んで取り上げます。

1）女性は祭司（司祭）になることはできない。ミサのいけにえを献げるなどの祭司になれるのは男性だけだからである。

この議論の根本的な問題は、新約聖書がはっきりと、新約聖書における使徒、預言者、教師、伝道者、長老、執事は祭司ではない、と語っていることです。新約聖書では、別個の祭司職の制度は必要ありません。キリストのいけにえが、祭司、神殿、いけにえを伴う旧約聖書の祭司制度全体を廃れたものにしたからです。新約聖書で私たちが耳にする祭司職は、次のものだけです。

1. すべての信者の祭司職。これには当然、女性も含まれます。そして、
2. キリストの天における大祭司職（ヘブル人への手紙を参照）。

この二つの間に、旧約聖書から引き継がれた、あるいは新約時代に任職された新しい祭司職というものはありません。実際、新約聖書では、いけにえと神殿にかかわる言葉づかい全体が霊的な意味に転じられ、私たちの自己献身や神への賛美に当てはめられています。そして神殿は、新約聖書のさまざまな箇所で（コリント第一3–6章参照）、信者のからだとして、あるいはキリストと御

霊が住まわれるキリストの共同体全体として描かれています。ここでの問題は、本質的に解釈学の問題です。ある時点で、ちょうど教会がコンスタンティヌスのもとで公認された宗教（religio licita）となったころに、旧約聖書的な解釈学が優位に立ちました。それは、教会堂を神殿と、主の晩餐をいけにえと、教職者を祭司と、主の日を安息日と見なす、といった解釈学です。これによって、新しい契約の新しさと、その諸側面や特徴は大きく損なわれました。そしてその最終的な結果が、さまざまな職務からの女性の締め出しでした。**しかもそれは、新約聖書の著者たちならきっぱりと退けたであろう理由によってだったのです。**

2）女性は牧師になることはできない。そうなれば、自分の夫を含む男性たちのかしらとなってしまうからである。それは決して許されず、新約聖書の家庭訓（ハウスターフェル）に反する。

この議論はしばしば複雑ですが、その核心においては、新約聖書が肉の家族と家庭における秩序について語っていることと、どこで集まるにせよ信仰の家族における秩序について語っていることとを、根本的に取り違えています。たとえばコロサイ人への手紙3–4章やエペソ人への手紙5–6章、そしてペテロの手紙第一のほかの箇所が、肉の家族の構造について語っているのは確かにそのとおりです。私が詳しく論じてきたように、新約聖書の世界では家父長制の家族が現にある現実でした。そして、新約聖書の中にあるものと新約聖書の外にあるものとを比べてみると見えてくるのは、**パウロや他の著者たちが、既存の構造をよりキリスト教的な方向へ変えようと懸命に努めている**ということです。**たとえばパウロは、聞き手のいるところから始め、それから彼らを説得して変わるように促さなければなりません。**そして皆さんは、この過程がピレモンへの手紙、コロサイ人への手紙、エペソ人への手紙の中で働いているのを見ることができます。たとえば、これらの箇所でかしらと服従の言葉が使われているのは確かですが、議論の向かう方向は次のようなことを目指しています。

1. 家長に対してますます厳しい規則を課し、彼の権力と、妻や子どもや奴隷に対する接し方を制限すること。
2. 妻や子どもや奴隷は、家畜や所有物ではなく、実際に神のかたちに造られた人格であることを、家長に自覚させること。

このことは、パウロがピレモンに対して、オネシモが「もはや奴隷としてではなく、……キリストにある兄弟として」いるという事実に基づいて、彼を解放するよう求めるピレモンへの手紙で特にはっきりします。**パウロは、すでに存在している関係の中に福音のパン種を入れ、それを変えようと働いているのです。**夫と妻の役割についても同様です。エペソ人への手紙5章21節以下で、パウロはすべてのキリスト者に互いに従うことを呼びかけます。その一つの形が妻の夫への服従です。そうすると、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい……」という勧めは、それがあるがままのもの、すなわち自己犠牲的な服従と奉仕の一つの形として見ることができます。パウロはここで、既存の秩序の内側から変化を目指す倫理を提示しているので、**服従はもはや一方の性に特有のものでも、一方的なものでもありません**（コロサイ人への手紙、エペソ人への手紙、ピレモンへの手紙についての私の注解書〔Eerdmans〕を参照してください）。**さらに私たちは、教会における指導の構造を決めるもの、あるいは決めるべきものは、性別ではなく、恵みの賜物と聖霊の賜物であることを、**

常に心に留めておかなければなりません。信仰の家族は肉の家族と同じではなく、性別はその中での役割を決める要因ではありません。もちろん性別は、キリスト教の家庭におけるいくつかの役割に影響を与えます。しかしそれは、教会の指導構造をめぐる議論においては無関係です。ですから、パウロの手紙の中にさえ、女性の教師、女性の伝道者、女預言者、女性執事、そして女性の使徒の例が見られるとしても、私たちは驚くべきではありません。**パウロは、既存の、堕落した家父長的秩序に洗礼を施して、それを良しとすることに関心のある人物ではありません。**こうした事柄についてのパウロの見方をはっきり示すしるしの一つは、彼が洗礼について語っていることに見ることができます。洗礼は、古い契約のしるしとは対照的に、新しい契約のために私たちが持っている、性別に限定されないしるしです。そしてパウロは、ユダヤ人も異邦人も、奴隷も自由人もないのと同じように、キリストにあっては「男と女」もないと付け加えています。この意味するところは計り知れません。契約のしるしの変化は、男性と女性に関して、契約の性質そのものが変化したことを示しているのです。

3）女性はキリスト教の説教者になることはできない。新約聖書のある箇所がそれを禁じているからである。

とりわけ非常に保守的なプロテスタント（福音派、「ブレザレン」）にとっては、ここが肝心な点です。コリント人への手紙第一14章33節後半–36節とテモテへの手紙第一2章8–15節が、女性が教会で教えたり説教したりすることを禁じている、と信じられているのです。

私はここで、こうした議論のいくつかに見られる偽善には触れないでおきます。それは、次のような細かな区別をする議論です。「女性が家で教えたり聖書研究を導いたりするのはかまわないが、教会堂の中ではいけない」（ちょっとした速報です。新約聖書の時代には教会堂などありませんでした。彼らは家々で集まっていたのです！）。あるいはもっとひどいものとして、「必要のある宣教地で女性が教えたり説教したりするのはかまわないが、必要のないここアメリカではいけない」。ここでも、その論理はまったく的外れで、聖書のどこにも根拠がありません。

では、これらの箇所はどうなのでしょうか。

コリント人への手紙第一14章33節後半–36節（これがこの手紙の本来の一部であることを前提とします。多くの学者が本文上の理由からそれを疑っていますが、私は疑う人たちには同意しません）は、問題解決のための長い手紙の一部です。パウロは、コリントの家の教会で起こっている問題を正しています。そうした問題の一つは、何人かの女性たち、どうやら何人かの妻たちだけが、質問をすることで預言（預言的な語り）の時間を中断させていたことによって引き起こされていました。パウロはすでにコリント人への手紙第一11章で、女性たちが自分の「栄光」（すなわち髪）を覆うために頭にかぶり物をするなら、キリスト教の礼拝で祈り、預言してよいと語っていました。礼拝においては神の栄光だけが見えるべきだからです。**そして彼は、コリント人への手紙第一14章33節後半–36節で、この許可を撤回してはいません。**コリントの教会は大部分が異邦人からなっており、預言について、また預言者や女預言者に近づくときに何がふさわしいかについて、すでに持っていた前提を教会の中に持ち込んでいました。たとえば近くのデルポイの神託は、人々が伺いを立てることのできる女預言者でした。人々は彼女のところへ行き、「この男性と結婚すべきでしょうか」「この土地を買うべきでしょうか」といった質問をし、神託が答えを与え

ました。ですから、一部のコリント人たちにとって、自分たちの集会で預言者が語るときには、その預言者に質問をする権利があると考えるのは自然なことでした。パウロの答えは否です。「礼拝の時間は質疑応答の時間ではありません。そしてあなたがたは預言者たちの話を中断させています。質問があるなら、家で自分の夫（おそらく文字どおり夫）に尋ねなさい。そのような質問には、ふさわしい時と場所があります。しかし、キリスト教の礼拝はそれではありません。」**この場合、パウロが女性たち／妻たちを正す理由は、もちろん彼女たちが女性だからではなく、この場合に彼女たちがこの問題を引き起こしているからです。**

この箇所については、ほかにもいくつかの点に注意しなければなりません。本文は、女性たちが**男性たちに**従うべきだということについては何も言っていません。ここでの勧めは、これらの女性たちが、律法も言っているとおり、静かにして、従うべきだ、ということです。では、旧約聖書のどこに、女性は黙って男性に服従すべきだという戒めがあるでしょうか。答えは、どこにもありません。モーセ五書にはまったくありませんし、ほかのどこにもありません。パウロが語っているのは、神の御前で沈黙し、神の霊感されたことば、すなわちこの場合には預言者や女預言者たちから来ることばに耳を傾けることなのです！「主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に静まれ（そして聞け）」……**そして神の教えに服従せよ。**

では、テモテへの手紙第一2章8–15節はどうでしょうか。この箇所は時に――誤って――女性が奉仕者となってはならないことの決定的な証拠と見なされます。しかしこれもまた、本文の文脈と細かなニュアンスを見落としています。そしてそれこそが、個々の聖句で何かを「証明」しようとするときの最大の問題なのです。パウロはここでテモテに、おそらくエペソにいる、回心したばかりの人々をどう扱うべきかについて指示を与えています（牧会書簡についての私の注解書 Letters and Homilies for Hellenized Christians, 第1巻, IVP を参照してください）。テモテへの手紙第一2章8–15節に現れている問題は、明らかに特定の女性たちにかかわるものです。すなわち、華やかな衣服と髪型で身を飾り、教会ですぐにでも皆の教師になれると思っている、身分の高い女性たちです。これが再び問題を扱う是正の箇所であることは、冒頭から分かります。パウロはまず、祈るべき男性たちが不平を言っていることを正し、次にこの身分の高い女性たちを正しています。パウロは、男性であれ女性であれ、誤っているときには分け隔てなく正すのです。女性たちへの是正に関しては、エペソのような都市の身分の高い女性たちについて述べておく必要があります。私たちが知っているところでは、そうした女性たちはギリシア・ローマ世界の宗教的祭り、神殿、礼拝儀式において重要な役割を果たしていました。彼女たちは女祭司、女預言者、教師、癒やし手、永遠の火の守り手などでした。ですから、そうした女性たちがキリストに立ち返った後、教会でも同じことができると期待したとしても不思議ではありません。問題は、彼女たちが、男性であれ女性であれ他の人々を教える前に、まず自分が正しく教えを受け、学ぶ必要があったということです。これは私たちすべてにとって良い原則です。以前、神学校のある授業で、学ばなければならないことがあまりに多いために苛立っている学生がいました。その多くは不要だと彼は考えていたのです。彼は私のところに来てこう言いました。「どうしてまずこんなことを全部学ばなければならないのか分かりません。私はただ説教壇に上がればいいのです。そうすれば御霊が語るべきことばを与えてくださいます。」私はこう答えました。「そうだね、チャーリー（Charlie）、君はそうすることもできる。ただ、聖霊が用いることのできる材料を君がもっと差し

出さないのは残念だね！」要するに、パウロはエペソのこれらの女性たちに同じことを言っているのです。彼女たちは、教える前に学ばなければならないのです。

テモテへの手紙第一2章8–15節の釈義について、いくつかの詳細を述べます。ここでもまた、女性たちが男性たちに従うべきだということについては何も語られていません。ギリシア語は十分に明快です。ここでは「静けさ」を表す語が使われており、沈黙を表す語ではありません。**そしてここでもまた、問題は彼女たちが、テモテや他の人々の権威ある教えに従うべきだということなのです。**第二に、フィル・ペイン（Phil Payne）が繰り返し示してきたように、「私は今は許さない」というギリシア語の動詞は、この許可の拒否が無期限に続くことを意味する動詞ではありません。それは言っているとおりのこと、すなわち「私は今は……許さない」という意味なのです。

なぜでしょうか。女性たちは、教える前にまず学ばなければならなかったからです。第三に、私たちが扱っているのは誤った振る舞いを正す本文ですから、ギリシア語は次のように訳されるべきです。「私は現時点では、女性たち（この場合、髪型や装身具や高価な衣服によって言及されている女性たち）が教えること、あるいは（権限を与えられた）男性たちに対する権威を奪い取ることを許さない。」**これは特権の濫用の禁止であって、キリスト教の教えを授けるという特権を適切に用いるための、後の許可の可能性を排除するものではありません。**実際、牧会書簡の別の箇所で、私たちは何かを教えている、より成熟したキリスト者の女性たちについて耳にします。ここでの動詞 **authenteo** はまれな動詞で、権威を行使する、あるいは権威を奪い取る、のいずれかを意味し、新約聖書ではここに一度だけ出てきます。これは、聖書の言葉をそのより大きな文脈、この場合にはギリシア語の他の箇所での用法という文脈から切り離して研究することはできない理由を示す、よい例です。他の箇所でこの動詞は、是正の文脈において、権力の濫用、すなわち他の人々が持っている役割や機能を不当に自分のものにすることを指しています。ここでも同じです。

最後に、創造の物語、エバの物語に関する議論はどうでしょうか。パウロは、聞き手の何人かがこの物語をとてもよく知っていることを前提にしています。この物語はヘブライ語では次のようになっています。善悪の知識の木に関する禁止について教えられたのはアダムだけでした。そしてこの禁止が言い渡されたときエバはそこにいなかったので、彼女を正しく教えるのは彼の務めでした。物語が進むにつれて、エバが正しく教えられていなかったことが明らかになります。彼女はその木の実に触れてはならないと言いますが、それは元の禁止の一部ではありませんでした。さて、ここでの「惑わされた」は重要な語であり、パウロにおいては、エバと堕落に関連してだけ用いられています。**正しく教えられていない人は簡単に惑わされ、致命的な行動を取ってしまうことがあります。エバの場合がそうでした。彼女は、エペソの身分の高い女性たちに示すのにうってつけの完璧な実例です。彼女たちは、何かを始める前に、正しく教えを受ける必要があったのです。**また皆さんに思い出していただきたいのは、創世記の物語を文字どおりに読むなら、この時アダムはエバのすぐそばにいて、彼女を止めることができたし、止めるべきだったのに、そうしなかったということです。エバは実を取り、アダムはこの場面で権威ある教師としての務めを取り落としてしまいました。疑いなく、それが、ローマ人への手紙5章12–21節でアダムが堕落の責任を負わされている理由です。それからパウロは一つの代案を示します。「しかし今、女性たちは子を産むことによって救われる」、あるいはもしかすると「女性たちは子を産むことを通して守ら

れる」という意味かもしれません。パウロがここで決してしていないのは、出産によって女性が救われることについて語ることです！！！ですから、私が提案した二つの解釈のどちらも可能です。私は、出産の前に置かれた定冠詞が特定の出産、すなわちマリアによるイエスの誕生を指している、という解釈に傾いています。つまりマリアは、エバを裏返しにした存在なのです。エバとは対照的に、彼女は御使いの声に従い、主のはしためです。もう一つの可能性は、女性たちが忠実なキリスト者であり続け、主に信頼するなら、女性に課せられている呪い（出産の際の痛みと危険）がキリストにあって取り消されうる、とパウロが言っているというものです。

いずれにせよ、この箇所は、あらゆる時代のあらゆる状況におけるすべての女性に対して、説教したり教えたりすることを禁じるものではありません。それは非常に限定された禁止であり、今日、前もってきちんと学ぶことなく神のことばを教えたり説教したりしようとする女性や男性に対しても、パウロは疑いなく同じことを言うでしょう！！！

創世記の物語について、もう一つ。著者は私たちに、堕落の結果が家父長制であると告げています。それは、創造の秩序についての神の本来の設計ではありませんでした。本文は、元の呪い（元の祝福ではありません）の一部がエバに下ると告げています。「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」！こうして、愛し慈しむことは、欲することと支配することへと堕落したのです！！！これは関係に対する罪の影響であって、生まれつきの性の特質や、関係そのものの質ではありません。

もう一つ、牧会書簡のこれらの箇所について話しているので付け加えます。時々、次のような議論を耳にします。テモテへの手紙第一は、長老がただ一人の妻に忠実な男性であることを前提としている。だから教会で長老になれるのは男性だけだ、というのです。しかしこれは、パウロがエペソであれクレタであれ、強く家父長制的な文化の中に宣教師として語りかけているということを、まったく忘れています。彼の原則は、人々にいてほしいと彼が願う所からではなく、人々がすでにいる所から始めることです。つまり彼は、福音のパン種が十分に働いて物事を内側から変えるまで、その文化にすでにある男性の指導から始めるのです。ですから、テモテとテトスがこの生まれたばかりの教会で、まず男性を指導者として任命するのはごく自然なことです。それは、いつまでも永遠にそうでなければならないという意味ではありません。しかし新しく回心した人々は、女性がそのような役割を担ってもよいのだということを、まず愛をもって説得されなければなりませんでした。けれども、パウロがすでにその方向へ押し進めていることが分かります。ローマ人への手紙16章1–2節で、彼はフィベという名の女性指導者に触れています。彼女はコリントの諸教会の女性執事です。そしておそらく、牧会書簡が長老と執事について論じている箇所でも、女性執事のことが言われています。前にも言ったように、パウロが何を言っているかを評価するだけでは足りません。それを文化的な文脈の中で読み、こう問わなければなりません。パウロは福音をその状況に当てはめるとき、人間関係にどのような変化をもたらそうとしているのか、と。

私が長年にわたって学んできたように……、教会における問題は、強くて賜物豊かな女性たちではありません。私たちには、得られる限りのそうした女性たちが必要です。もし彼女たちがいなかったら、多くの教会はとうの昔に閉鎖されていたでしょう。私は、モスクワのバプテスト教会

でバブーシュカたち、すなわちおばあさんたちに出会ったときのことを、今でもありありと覚えています。彼女たちは入口に立ちはだかり、スターリンの部隊が教会を閉鎖するために入り込めないようにして、スターリンが教会を閉鎖するのを阻んだのです。教会の中の強く、賜物豊かな女性たちのゆえに神に感謝します。**いいえ、教会における問題は強い女性たちではなく、強い女性たちに脅かされていると感じ、疑わしい釈義をも含むさまざまな手段を使って、彼女たちが教会で自分の賜物と能力を発揮することを禁じようとしてきた弱い男性たちなのです。**

この方向でさらに知りたい方は、私の注解書か、一般信徒向けの私の要約版、Women and the Genesis of Christianity（Cambridge University Press、1990年）をお読みください。

言うべきことは言いました。

原文：「Why Arguments against Women in Ministry Aren't Biblical」、ブログ「The Bible and Culture」（Patheos）、2015年6月2日。ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf（ベン・ウィザリントンの許可を得て）、2021年4月20日。